

1年C組図画工作科・三浦菜子実践「ふしぎなせかいでみつけたよ〜くものって〜」 —図画工作科における指導姿勢に関する考察—

1. 題材「ふしぎなせかいでみつけたよ〜くものって〜」の成果

2025年1月22日から秋田市アトリオンで開催された展覧会「ファインアート秋田2025」で、秋田県の作家や美術活動に取り組む高校生などの作品とともに、1年C組全員の作品「どうぶつさんとあそぼう」が展示された。子供たちが四つ切りマーメイド紙に表現した作品は、試行錯誤である「つくり、つくりかえ、つくる」(『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 図画工作編』より)を楽しんだり、自分の表し方を追究したりすることでは、他の方々の作品と比べて遜色がなかった。この要因について、図画工作科を指導する全教員の指導姿勢の在り方を考察することで、明確にしたい。

2. 指導者としての責任を果たす図画工作科の指導姿勢について

前回、「先導者的視点」と「同行者的視点」について論じた。ここで「視点」を「姿勢」と改めて、「先導者的姿勢」と「同行者的姿勢」、新たに「傍観者的姿勢」についてモデル的に論じていく。このことで、図画工作科を担当する全教員が、職責を果たすために身に付けるべき指導姿勢に言及する。なお、ここでは「表現」を扱い、「鑑賞」は別の機会とする。

(1) 「先導者的姿勢」

教員に材料・用具の扱い方や表し方などが身に付いていることが基本となる姿勢である、表現の各段階や結果が予想できることを活かして、積極的に子どもの知識や技能の習得、発想や構想の展開、そして表し方などに関与していく。

この姿勢は、図画工作科だけでなく他教科においても、それぞれの教科に対する得意意識、あるいは高い価値を感じる教員に、頻繁に見られると考えられる。図画工作科ではかつて、大変好ましく、目指すべき姿勢とされていた、と長瀬は考えている。

教員としての高い評価が得られやすい「先導者的姿勢」を全ての教員がもつことは、現実的に困難であると考えられる。本学部の小学校免許取得希望者でも、高等学校で美術科を選択しなかったことで「表現」に親近感をもたない者や、図画工作科や美術科で「表現」への苦手意識を形成している者は、学部での図画工作科指導に関連する科目の時数だけでは、形成が難しい。

この姿勢の留意点は、明確な見通しがあるからこそ、いわゆる「マニュアル的指導」や「先回り指導」に陥ることである。さらには、子どもの主体的姿勢を弱めることも懸念される。

(2) 「同行者的姿勢」

「同行者的姿勢」とは、材料・用具の扱い方や表し方の指導は基本的なところに留め、専門的ところまでは踏み込まない。子どもが工夫するように導く。表現の方向性は大まかな提示で、発想・構想や表現行為には間接的に関与する。子どもが自ら考え、工夫し、自分なりの表し方で進んでいくように導く。

「同行者的姿勢」は子どもに寄り添い、表現者として認め励まし、各過程で生じる疑問や方向性を共に考えていくので、一見消極的に見える。しかし、子供の主体的、意欲的、創造的な姿勢を「学びのメインエンジン」とする本質的なものである。学習過程が拡散的であることにも価値がある図画工作科では、「先導者的姿勢」と同等以上に重要な姿勢であると、長瀬は考えている。

「同行者的姿勢」は全ての教員が目指すことができる、と長瀬は考えている。更に述べれば、造形の表現や鑑賞に苦手意識をもっている小学校教員であっても、人間形成に重い責任をもつ立場にある者として、「同行者的姿勢」を基本と考え、自分の中に形成しなくてはならないし、磨かなければならない、と長瀬は考えている。

(3) 「傍観者的姿勢」

この姿勢は図画工作科において、他教科より多く見られると考えている。要因は何だろうか。本教科を軽く扱っても非難されない、本教科への苦手意識を払拭できないなどが考えられる。

この姿勢の教員は、授業での指導言が「導入」での「説明」及び「指示」で終わる。以後は「傍観」で、子ども一人一人の表現活動の見取りが形式的で、ややもすれば図画工作科の指導以外のこと、つまり自分が優先度が高いと考えたことを行っている。「まとめ」では、これも形式的な振り返りに終始し、次時への表現意欲継続や、試行錯誤への意欲喚起が見られない。

3. 三浦教諭の指導姿勢

以上の「先導者的姿勢」と「同行者的姿勢」は二者択一ではない。「先導者的姿勢」を案内者的な姿勢に昇華させて、二つの姿勢を各人各様の配分比で、図画工作科を指導する全教員が形成していくことが長瀬の理想である。しかし、現実的には難しいことである。繰り返しのようになるが、「傍観者的指導姿勢」を自分の中から排除し、「同行者的姿勢」を形成する意志を継続させていくことを、図画工作科を指導する全教員に務めていただきたい。

前回は述べたが、三浦教諭はバランスよく二つの姿勢をもっている。少なくとも、二つの姿勢をもつ努力を継続している。そこから子どもの「主体性」と「問い」を大切にする図画工作科の授業が生まれている。本校『研究紀要』の【授業実践記録】を読む際には、三浦教諭の指導姿勢についても考えていただければ幸いである。